

川越街道ウオーク【IV】新座駅からふじみ野駅(上苗間バス停)まで

歩行距離 約11km

集合場所 JR 武蔵野線新座駅改札口

集合時間 午前9時50分

新座駅の南側(左南口)のロータリーを左へ、通りを左へ行き、信号の次の左へ道を入り、高架を潜って突き当りを右に道なりに進む。県道109号線に出て、信号を渡り、左折。次の信号の手前右側に参道に鳥居が4基建っている「神明神社」がある。境内にはここから1.5km北の大字北野の稲荷神社を合祀されている。

### 神明神社

江戸時代に幕府が編纂した地誌書「新編武蔵風土記稿」には、

氷川社 下分(しもぶん)のはしにあり、祠は二間四方許(ばかり)。

(中略)

神明社 上文(かみぶん)にあり。本社間口三間、奥行二間半、又側に九尺二間の祠あり。これも神明を祀る。

稲荷社三 村内にあり。

と記され、神明神社は、野火止上の境界に位置しています。

祭神は、天照大神と倉稲魂命(うかのみたまのみこと)が、祀られています。

明治四十年北野八軒の稲荷神社を合祀して、境内社として稲荷神社を祀っています。

境内には、石工銘の刻まれた鳥居や、常夜燈、御百度石、庚申塔、秋葉権現石祠、金比羅宮石祠等、多くの石造物が置かれ、信仰の様子が偲ばれます。

昭和の始めには、野火止用水が、境内の横を流れ、水車をまわし、又、旱魃の際には、雨乞いの行事が行われました。

平成六年三月

新座市教育委員会

新座市文化財保護審議委員会

### 神明神社

御由緒

当地は、江戸初期、川越藩主松平信綱によって開かれた野火止新田の内である。最初五十四軒を入植させて開墾させたが、飲料水も満足に得られない土地で、大変困難な事業であったという。

創建については、地内の旧家である島村家の口碑に次のようにつたえられている。かつて比企郡神戸(ごうど)村(現東松山市神戸)で名主を務めていた島村家の祖先が、大飢饉で年貢に困る村民を見兼ね、代官へ石数を偽って上納したため打ち首に処せられた。島村家には女三人男一人がいたが、男子小源太は危うく難を逃れ、氏神である神明様の御神体を背負い当地へ逃げ延びた。その後小源太は野火止用水の開削に貢献して新田の農耕を安定させると、神社を奉建して御神体を納めたという。

『風土記稿』野火止宿村の項には「神明社 上文にあり、本社間口三間奥行二間半、又側(かた

わら)に九尺二間の祠り、是も神明を祀る」と載せられている。この本社側にあった祠については、あるいは島村家が当地へ土着した当初、同家の氏神として祀った社ではなかろうか。ちなみに、いつころかこの祠はなくなり、現在の境内にはその跡を見ることもできない。

明治四十年七月、当社は大字北野の村社稲荷神社、同境内社神明神社を合祀した。境内にある末社稲荷神社には、合祀を記念して、氏子により奉納された石製の絵馬が今も残されている。

御祭神 天照大神

大和田地区に入って緩やかな坂を下り始めると、浅田工務店の向かい、右手高台の大きな杉の木の下に祠があり、中に「鬼鹿毛の馬頭観音」が安置されている。元禄九年(1696)の建立で、新座市内最古最大の石造馬頭観音だとのこと。傍らに解説板がある。また、馬頭観音の左手には「馬頭観世音拝禮塔」や「武州上岡馬頭観世音大護摩記念碑」が建っている。

馬頭観音の右手には、芭蕉の句碑がある。「花は賤(しず)乃 眼にもみえけり 鬼薊(あざみ)」とある。

## 市指定有形民俗文化財

### 鬼鹿毛の馬頭観音

平成二年五月十日指定

昔、秩父の小栗という人、江戸に急用があって、愛馬鬼鹿毛に乗り道を急ぎました。大和田宿に入ると、さすがの鬼鹿毛も疲れが見え、この場所にあった松の根につまづき倒れました。

しかし、さすがは名馬、ただちに起きあがり主人を江戸まで届けたといえます。所用を終えた主人が先ほど馬をとめたところまで戻ると、いるはずの鬼鹿毛の姿が見えません。不思議に思いましたが仕方なく家路を急ぎました。

やがて、大和田の地にさしかかると、往路愛馬が倒れた場所に鬼鹿毛の亡がらを見つけました。鬼鹿毛は主人の意を知り亡霊となって走り続けたのでした。

村人は、のちに鬼鹿毛の霊を吊って馬頭観音を建てたといえます。これが「鬼鹿毛の伝説」です。

鬼鹿毛の馬頭観音は、元禄九年(1696)に建立され、市内最古・最大の馬頭観音です。

像高は、約百二十七センチメートルで、三面六臂(三つの顔と六つのひじ)の丸彫立像です。

平成三年十二月

新座市教育委員会

新座市文化財保護審議委員会

鬼鹿毛の馬頭観音の解説板の隣に「川越街道」の解説板がある。

## 川越街道

川越街道は川越往還と呼ばれ、江戸日本橋から、川越まで、約十一里を結び、五街道と並ぶ重要な道でした。江戸時代、川越は、江戸の北西を守る要となり、藩主には、老中格の譜代大名が配置されました。又、家康以下、三代将軍も鷹狩や参詣にこの街道を往来し、松平信綱が、川越城主となってからは、さらに整備されるようになりました。

街道には、上板橋、下練馬、白子、膝折、大和田、大井の六か宿が設置され、人馬の往来が盛んでしたが、各宿場の村にとって、伝馬役の負担も大きかったようです。

「新編武蔵風土記稿」によると、大和田町は、  
郡の西にあり、江戸より六里余。村内東西を貫きて、川越街道一里許係れり。この街道を西行すれば、入間郡竹間沢村に至り、東行すれば、郡内野火止宿に至れり。  
と述べられ、街道沿いには、人馬にまつわる伝説や道標が残り、往時の宿場のにぎわいが、しのばれます。

平成六年三月

新座市教育委員会

新座市文化財保護審議委員会

鬼鹿毛の馬頭観音から100m弱下った左の道を入った奥の右側に「六地藏」があり、その奥に「石造の地藏菩薩立像(高地蔵)」と庚申塔がある。

### 高地蔵

江戸時代の大和田には、川越街道を軸に、宿場町が広がっていました。江戸時代中頃の享保年間に、町の両端に一对の地藏菩薩が置かれました。一体は柳瀬川の近くに置かれましたが、英橋の工事に伴い、観音堂前に移設されておます。

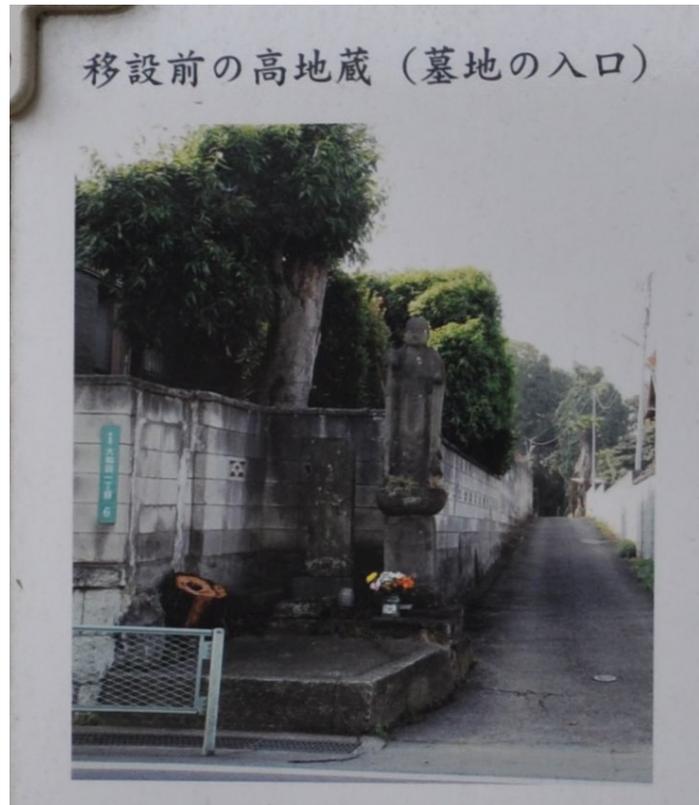
そして、ここにあるもう一体は、「帖(はけ)上の墓地」という埋め墓の入口に置かれ、長く川越街道の往来を見守ってきましたが、平成二十八年七月、新座駅北口区画整理事業に伴い、現在地へ移設されました。

平成二十八年七月

新座市

新座駅北口土地区画整理事務所

新座市教育委員会



大和田中町交差点の先の新座大和田郵便局の隣に「観音堂」があり、その前に「石造の地蔵菩薩立像」がある。このお地蔵様がもう一体の地蔵菩薩である。

県道109号線は国道254号線に合流、英橋で柳瀬川を渡る。渡り切ると英インターの国道の下を潜り直進する。潜るトンネルの入口近くに「国道254号線(川越街道)の道標柱」があり、「川越駅12km(200分)、ふじみ野駅6.7km(115分)、新座駅1.5km(25分)・・・」とある。次の信号で左側に渡り、坂を登る。坂の途中、左に急な石段があり、登った右手に「富士塚」があり、「三国第一山」と刻まれた石碑があり、横には「御山改修記念」と刻まれた石碑、「太々御神楽」と刻まれた石碑が2基ある。また、石段の横、法面に「御中道修業」の石碑がある。坂を登ると左側が跡見学園大学新座キャンパスである。

跡見学園から400m程で、国道254号線はケヤキの中央分離帯が始まる。その分離帯の先端に「川越街道」と記した大きな石碑がある。又、ここで新座市から入間郡三芳町となる。直ぐの資料館入口交差点の先に「国道254号線(川越街道)の道標柱」があり、「ここは三芳町竹間沢(ちくまざわ)川越駅11km(190分)、ふじみ野駅5.5km(95分)、・・・」とある。交差点から約900m三芳町役場入口交差点、その交差点から約100m左に「木宮稻荷神社」がある。参道には、手前に木製の両部鳥居、その奥に石造神明鳥居がある。

### 木宮稻荷神社

伝承によれば、寛文元年(1661)東都の中山治左衛門という人が大阪在業の際、霊夢を見て社殿を再建したと伝えられています。稻荷神社は、藤久保のような畑作を主体とした地区では農業神として信仰され、江戸時代には、藤久保の修験であった東乗院が別当寺として祭祀をおこなっていました。祭礼は、二月初午、4月20日の春祈禱、10月8日のお日待ち(秋祭り)です。春祈禱には、藤久保芸能会会による藤久保囃子の奉納があります。

また、神社境内には、山神社、八坂神社、浅間神社等も祀られている。このうち、八坂神社と浅間神社は、稻荷神社とは別の場所に祀られていたものを境内に移したものです。浅間神社は、もとは藤久保の北にあった富士塚に祀られていたもので、今も富士塚という地名は残っており、浅間神社の石祠が祀られています。また、昭和になって川越街道拡幅の際には境内に道が通ることになり、その名残として路側帯に幟幡が残されています。(三芳町HPより)

中央分離帯と並木道はこの先で終わるが、終わるところに「川越街道」と彫られた大きな石碑が川越の方を向いて建っている。この信号交差点を左に入ると「緑地公園」があり、ベンチがある。また、その先のグラウンドの奥にトイレがある。

街道に戻り、600m強進んだ左手に「広源寺」がある。

### 広源寺

曹洞宗(禅宗)大栄山広源寺と号し、蓮光寺(川越市渋井)の末寺である。創建年代は、寛永十六年(1639)に竜国呑海大和上の開基とされる。川越街道の成立や藤久保の開拓着手の時期と同じころに創建された寺院である。

本尊には、釈迦如来坐像を安置する。また、ここは明治七年に藤久保小学校が開設された所で、三芳町の教育を語る際には欠かせぬところでもある。

境内には、左手には立派な休憩コーナー、右手には東司(トイレ)が備えられている。

次の信号交差点(藤久保交差点)の200m程先の交差点から再び立派な並木の分離帯が始まり、分離帯の端に「川越街道」の大きな石碑があり、横断歩道の右側に享和二年(1802)の銘がある「庚申塔」がある。

並木の分離帯は、約900m、ふじみ野市との境付近まで続く。分離帯の終点到、4つ目の「川越街道」の石碑がある。石碑を過ぎて250m弱の右側に「下木戸跡」の解説標柱がある。ここから大井宿が始まる。

### 下木戸跡

江戸時代、江戸をはじめとする城下町や宿場町などの出入口には、治安維持を主な目的として、夜間や非常時に閉鎖される警備用の木戸が設けられました。言い伝えによれば、大井宿にも南北を貫く道巾六メートル余の川越街道の入り口二か所に木戸が設けられ、そのかたわらには、旅人の道中の安全を祈るために、石の地蔵が立てられていました。大井宿の施設を詳細に描いた絵図や文献等の資料が発見されていないため、木戸の形については明らかではありませんが、両開きの大扉の左右に、緊急時の通行用であるくぐり戸を設ける形式であったと思われる。

向かい側の路地(民家の庭先)の奥に「克福稲荷神社」があるとネットには書いてあったが、分からなかった。道は下り坂となり、途中右側奥に「大井稲荷神社」がある。

### 大井稲荷神社

(前略)

昔から“坂上の稲荷様”と村民に親しまれてきた大井稲荷神社の創建は詳らかではありませんが、江戸時代の初め頃にはすでにあつたようです。祭神は宇迦之御魂命で、一、六〇〇坪余の神領があり、他の七か所の町の宮と共に本乗院(徳性寺)が管理していました。江戸時代終わり頃の記録では、氏子は一五〇戸余りで、毎年二月の初午の日に、お神楽をあげてお祀りをしていました。その頃の本社は、間口三尺九寸・奥行三間で、現在でも氷川神社境内に天明二年(一七八二)銘高さ八尺の石の鳥居が残っています。

明治維新後は、神仏習合の禁止によって、徳性寺を離れて、大井氷川神社の管理に移りました。境内も三〇〇坪余りとなり、一部は官林となりました。後に神社の修復のために立木を伐採していますが、その時の記録には、杉一三四本・槻(樺)三本とあり、うっそうとした鎮守の森があつたことがうかがえます。(中略)

明治四〇年(一九〇七)無格社である稲荷社は、他の金山社・高根社・久田社と主に氷川神社に合祀され、跡地も無代譲与となりました。合祀の後には、稲荷様を個人の宅地内に分祀し、有志によりお祀りしていました。

昭和四一年(一九九六)稲荷神社は、もとの場所に本社が再建され、石段・鳥居・上家も講の有志によって寄贈されました。(後略)

大井稲荷神社から5・60m進むと「大井橋」があり、下には鎌倉時代に掘られたという「砂川堀」が通っているが、現在は一部分暗渠になって埋まって見えない。大井橋の階段を降りて暗渠を100m程進むと暗渠は無くなり、堀となる。その手前左側に「大井戸跡」の標柱と解説板がある。砂川堀を更に進むと「本村

(ほむら)遺跡があり、その横の東原親水公園のはトイレがある。

### 大井戸跡(おおいどあと)

武蔵野台地は、地下水が低いため、往時の旅人や、定住しようとした住民にとっては、水が得られず苦しみました。

水を得るために、井戸を掘ってもローム層が厚く、その下の砂礫層は崩れ易く、しかも水位が低いため、特に深く掘る必要がありました。

元禄九年(一六九六)の大井郷田畑水帳には、川越街道・古道(鎌倉街道)と砂川堀とに囲まれた三角形の、この低い低地を「おい戸」「おいと」と記されています。武蔵野台地の上から掘ると大変な労力がかかるので、段丘を侵食して流れる砂川堀に近い台地の崖下に井戸を掘りました。これだと浅い井戸で水を得ることができるからです。

また江戸幕府によって、文政期(一八一八～一八二九)に編さんされた「新編武蔵風土記稿」には、「小名大井戸 村ノ東ニヨリテアリ土人或ハオ井ドトモ呼フ、昔古井ナトアリテ村名モ此井ヨリ起リシ旧地ナルニヤサレト其ツタヘヲ失セリ」とあり、すでに伝説となり所在も不明になっていました。

一九七五年に「オ井ド」の三角形の地を発掘したところ果たせるかな、井戸の遺構が見つかり、井筒の底から須恵器片が出土したことから平安時代に造られたことがわかりました。

その規模は、現地表から約三メートル下の立川砂礫層を掘り込んで粘土層に達するもので、直径一・八メートル×一・五メートルで砂礫層から深さ一・五メートルの底には直径約三〇センチのまわりに礫で、井筒を築いていました。ここから水が湧いていたことを示す砂の薄い層が堆積していました。

この井戸は、共同井戸として使われ、規模こそ大きくありませんが、水の得にくかった当地方の中で井戸の尊称としての「オ井ド」が転訛して大井戸となったと思われます。

井戸の北西五〇メートルのところには水神様と呼ばれていた神明社が祀られていました。村の人々に潤いを与えた「オ井ド」は、元禄期にはすでに廃井戸になり埋められてしまったことが水帳からわかります。

平安時代の末に武蔵七党・村上党の頼任の孫の家綱が、大井党を名乗りました。その姓もこの井戸に由来するものです。

暗渠が終わるところの十字路を左に行ったところに、「復元大井戸」がある。街道(国道254号線)に出ると向い側に「徳性寺(とくしょうじ)」がある。山門を入った左手隅に、南木戸跡(下木戸跡)にあった明和四年(1767)銘の石造地藏菩薩と、近くで出土した弘安四年(1281)銘の古い板碑などが並べられている。

特に弘安四年銘の「阿弥陀一尊板碑」は、高さ117cm、幅31cm、厚さ3cmで、ほぼ完形品である。

### 徳性寺

天台宗天龍山本乗院徳性寺は、川越市の灌頂院の末寺で、伝承によれば、今から四百五十年程前の室町時代、秀山律師により開かれたという。一時、寺勢が衰えたものの、江戸時代前期、第十四世祐円和尚(万治三年・一六六〇年没)により中興された。明治一四年(1881)一月一日の大井町の大火により本堂・庫裡などの建造物と共に当時の歴史を記した記録も失われてしまった。

現在の本堂は、昭和四八年(1973)に、庫裡は昭和五五年(1980)に再建されたものです。

本尊は、昭和室町時代のもと考えられる阿弥陀三尊像である。本堂には江戸時代初期に大井を領地とした旗本の米津彦七郎(過去帳には彦七とある)の位牌(天和二年・一六八二没)が祀られている。また本堂裏手の墓地には歴代住職の墓塔のほか、元和九年(1623)銘の五輪塔(新井家墓地)があり、寺の歴史の古さを今に伝えている。

山門は、大火の後の明治二五年(1892)に移設されたもので、川越の南院(廃寺)のもとも川越城の遺構であるとも言われている。この山門の脇には、坂上(小字東台)近くの石塔畑と呼ばれる場所から出土した弘安四年(1281)の銘を持つ板石塔婆をはじめとする二十数基の板石塔婆や大井宿の南木戸(江戸側)に立っていたとされる石の地藏など大井の歴史を物語る多くの石造物をみることができる。

また、当寺では、遺骸を埋葬する場所(埋め墓)と墓塔を建てる場所(詣(まい)り墓)とが異なる両墓制を見ることができた。

平成十三年十一月

ふじみ野市教育委員会

ふじみ野市文化財保護審議委員会

## ふじみ野市指定文化財 考古資料

### 弘安の板碑(板石塔婆) 昭和五十三年四月一日指定

この板碑は、高さ一一七cm、幅三一cm、厚さ三cmの大きさで、元(現在の中国)が北九州博多に侵攻した弘安の役(元寇)が起きた弘安四年(一二八一年)の銘が記されている完形品である。鎌倉街道と伝えられる古道に面した「坂上の石塔畑」と呼ばれる場所(東台)から出土し、徳性寺境内に移されたという。「大井町念仏講中」と刻まれた台座は後世のものである。

板碑とは、鎌倉時代から室町時代を通して板状の石で造られた供養塔で、「板石塔婆」、「青石塔婆」、「ばんび」、「いたぼとけ」とも呼ばれ、日本全域に分布している。埼玉県内の板碑の多くは青緑色の緑泥片岩(結晶片岩)で造られており、この板碑も同じ材質である。

板碑の歴史的な価値は碑面に刻まれた記録にあり、その中でも種子(しゅじ・梵字)を見れば仏の種類がわかり、造立者の信仰が知られる。この碑面の種子には「口(阿弥陀の梵字)」が刻まれて阿弥陀仏を表現し種子の下には蓮座を刻んで礼拝の対象としていたことがわかる。この板碑造立の頃には、最も大型で厚いものが多く、形式が整い、意匠が秀抜で、梵字の書体も企画的で、かつ彫法に鋭利な力強さが認められ、中には在地領主層の造立と考えられるものがある。この板碑もその一つである。

中世の史料が少ないふじみ野市にとって、板碑の分布から集落の状態、梵字による宗教の種別と信仰状態、石材を入手するための交易の範囲などをうかがえる貴重な資料として、この板碑の持つ意義は大きい。

平成十九年三月

ふじみ野市教育委員会

徳性寺から約200mの左側の大井中宿バス停の前方直ぐの小林理髪店の前に「**従是川越迄二里十八丁**」の道標が立っている。

### 「従是川越迄二里十八丁」の道標

慶応三(一八六七)年作製の「大井町絵図面」には、本陣の脇に高札場が描かれています。江戸時代の宿駅の高札場には、切支丹禁制をはじめとする高札の他に、駄賃と人足賃及び次の宿までの里程を記した高札が掲げられていました。大井宿の高札場であったと考えられる場所には、「従是川越迄二里十八丁」(約一〇キロメートル)と記された柱が立ち、ここが宿場町であったことを思い起させるよすがとなっています。

続いて左手に「大井宿と本陣跡」と書かれた標柱と「大井宿と本陣」の解説板がある。本陣新井家跡は喫茶店のように近代的な家である。新井家は名主、問屋場をも兼ねていた。

## 大井宿と本陣

大井宿は、川越街道の六宿場(大井・大和田・膝折・白子・下練馬・上板橋)のうちのひとつとして、江戸から約八里、川越城大手門(現川越市役所)から二里半の道程にありました。江戸時代以前の大井宿は大井郷と呼ばれ、川越街道より東方の現在の東原小学校を中心とした「本村(ほむら)」などの地名のところに集落があったことが発掘調査により確認されています。

江戸時代にはいり、川越街道の各宿場が整備されるに従い、この集落が街道沿いに移転せられ、寛永期ごろにはほぼ宿場の町並みができあがったものと思われます。その後、元禄十一年(一六九七)にはそれまでの旗本米津氏の知行地から川越藩領となり、大井村から大井町(宿)の呼称へと変わっていきました。

江戸時代中期の宝永二年(一七〇五)の「大井町明細帳」には、家数九四軒、人口四七九人(男二五七人・女二一七人、僧三人、同心二人)、このうちに米・酒・塩・小間物などを扱う商人が五人と桶屋は一人がおり、また馬が六〇疋いと記され、宿場としての賑わいが感じられます。

諸大名や幕府の役人の宿所である本陣は、代々名主役と兼帯で当所の新井家が勤めました。本陣には問屋場もあり、大井宿における公用の伝馬と人足を手配し、荷物や人の継ぎ立てをおこなっていました。継ぎ立ての賃金は、公用の人馬は六人と六疋(のちの天保一二年には十三人・十三疋)までは安い「御定賃銭」で、一般の人々はこの倍の「相対賃銭」でした。

川越藩主の参勤交代などの通行では、江戸に近い川越街道の宿場で宿泊することなく、大井宿本陣においても小休と人馬の継ぎ立だけがおこなわれていました。川越街道の交通量は次第に増えていき、幕末には旅籠屋・茶屋として河内屋・柏屋・うどん屋・中屋、木賃宿では中島屋がありました。明治維新後は公用の継ぎ立てはなくなり、一般の人々の通行で旅籠や茶屋が賑わいましたが、明治十四・十五・二十五年の三度の大火にあい、町並みはほとんど焼失してしまいました。

平成十二年十月

ふじみ野市教育委員会

ふじみ野市文化財保護審議委員会

本陣跡から二つ目の東入間警察入口信号交差点を右折し、少し戻った“メンズプラザ アオキ”の南角・バス停の傍に「上木戸跡」の標柱がある。ここまでが大井宿である。

交差点を渡り右折し、70m 程行くと東武バスの「上苗間バス停」がある。今日はここまでにしたい。

駅まで歩くと、少し川越方面に行き、旧道からふじみ野駅入口交差点を経て、駅まで1.3km強あり

次回、歩いて街道に出ることを考えると、バスに乗った方が良いと考える。

上苗間バス停ふじみ野駅行時刻表

13時 17分、41分

14時 03分、19分、41分

15時 12分